1

バスを降りようとしたとき、ステップのところで、すぐ近くにいた男性客の背中に手を触れてしまった。その男性客は女のことを考えていた。目のパッチリとした可愛らしい顔立ちの若い女性で、ころころと笑い転げている。

停留所に降りたところで、貴子(たかこ)は素早く頭をめぐらせ、その男性客を見た。彼は貴子に背を向け、急ぎ足で去ってゆくところだったが、二、三歩行ったところで強い春風に顔をそむけ、ちょっとうつむくようにしてこちらに横顔を見せた。風を避けようと目を細めている。歳は三十歳ぐらいだろう。紺の背広に同系色の縞(しま)のネクタイ。背広の上からカーキ色のコートを羽織っている。どこにでもいる若いサラリーマンの出で立ちだ。

風が吹き抜けてしまうと、彼は頭をあげ、土埃(つちぼこり)をはらおうとするように、顔の前で手をひらひらさせた。眉根を寄せて、ひどく憂鬱(ゆううつ)そうな顔をしている。楽しそうに笑い転げる女のことを想いながら、どうしてそんな表情を浮かべていられるのだろうと、貴子は思った。女は彼の恋人か、若い妻だろう。彼女のことを想うと憂鬱なのか。それとも、ただ春風が嫌いなだけだろうか。

カーキ色のコートの男は、再び、道路沿いに、バスの進行方向に向かって歩き出すと、最初の四つ角を左に折れた。姿が消えた。貴子は視線を離すことができず、それを見送っていた。

町のこのあたりは、ここ数年、再開発が進んでいる。五年前、終戦直後の創業だという大きな鉄鋼会社が地方に移転したことが、そもそものきっかけだ。空いた土地をデベロッパーが買い取って、商業ビルを建ててテナントを募ったり、企業のビルを誘致したりしている。カーキ色コートの男が歩いていった方向には、二年ほど前に建てられたある都市銀行のコンピュータセンターと、昨年暮れに都心から引っ越してきた大手建材会社の本社兼ショールームのビルがある。男は、そのどちらかに勤めているのかもしれない。

彼の後を追いかけていって、さっきあなたがバスのなかで考えていたあの女の人は誰ですかと、問いかけてみたらどうなるだろう。彼とあの女の関係を知りたいものだと思った。女は笑っているのに、彼は憂(うれ)いの顔をしている。それに、背中に触れたとき伝わってきた彼の感情のなかにも、笑いに近いものはなかった。笑いは、怒りの次にキャッチしやすい感情だというのに。

これも、鈍ってきていることの、ひとつの証拠だろうかと、貴子は考えた。以前の貴子ならば、あのカーキ色のコートの背中に触れたとき、女の笑い顔だけでなく、それに対する彼の感情も、すかさずキャッチすることができていたのではないか。

――やっぱり？

やっぱり、衰えてきている？

一陣の、挨っぽい春風が吹きつけてきた。貴子は顔をうつむけ、ちょうどさっきのカーキ色コートの男と同じ仕草で、風から目を守った。コートの裾が舞い上がる。と、背後で声がした。

「よう、なんでまたこんな道ばたで目の保養をさせてくれてるんだよ」

風を避けながら振り向くと、大木明男が笑っていた。まともに突風を受けているので　くしゃくしゃな顔をしている。寒がりの彼は今朝もまだ冬物のコートを着込み、ボタンをきちんとめていた。

「春は大嫌い」と貴子は言った。「この風で、桜もみんな散っちゃうでしょうね」

「春はいいじゃねえか、ミニスカートをはいても冷えなくてさ。いいスーツだねえ」

貴子は萌葱色のスーツを着ていた。上着丈もスカート丈も、思い切って短めのものだ。大木は、自分の身の回りのことなどほとんどかまわない男だが、不思議と女性の服装には敏感で、貴子が新調の服を着ていったり、新しいアクセサリーを身につけていたりすると、必ず目をとめて、ひと言ほめてくれる。それほどマメな男が、どういうわけで三十五にもなって未だに独

身なのかと、同僚たちは首をひねる。

貴子は、その疑問に答えることができる。大木は確かに、誉めることは誉めるのだけれど、洒脱なことは言えないのだ。今も、「その色、草餅の色だね」と言った。

貴子は吹き出した。「嫌ねえ。それじゃ台無しよ」

「そうかねえ。しかし、ポンちゃんは膝小僧が可愛い。もっとちょいちょいミニをはくといい」

貴子をさして「ポンちゃん」と呼ぶのは、刑事部屋のなかでもごく限られた同僚たちだけだ。交通課にいたころには、内々ではもっぱらその通称で通っていたから、異動したばかりのころは、寂しく感じたものだった。

「何をぼうっと突っ立ってたんだ？」と、大木は訊いた。「痴漢にでもあったかい？」

彼は貴子とは反対方向のバスを利用している。ふたつのバスは、朝夕の通勤時間帯には、ほとんど同じダイヤで運行しているから、貴子がバスを降りたのと同じくらいに、彼も道の反対側のバス停に降り立ち、貴子がいるのに気づいて、こちらを見ていたのだろう。

「痴漢？　どうして？」

「一緒に降りた男を、ずっと目で追いかけてたじゃねえか」

見るからにもっさりとしていて、毎回のように昇進試験を受けては落ちている大木だが、目はいいのだ。刑事課に配属されてすぐに、貴子は、誰かに不審を抱かれるとしたら、おそらく

は大木がいちばん先だろうと思ったし、その勘に間違いはなかった。今も、象のように小さくて悲しげな彼の目は、にこにこ顔の表情を裏切って、ぴたりと貴子の上に据えられていた。

「何でもないんですよ」と、貴子は言った。

「ただ、さっきの人が、バスのなかでずっと独り言を言ってたから。何の商売かなと思っただけ」

「どんな独り言？」

「さあ……融資がどうのこうのとか呟いていた。銀行の人じゃない？」

「木の芽時だからな」と、大木は言った。「妙なヤツが増える」

「ホントね。忙しくなりますよ。突っ立ってないで、早く行きましょう」

バス停から、城南警察署の正面玄関まで、歩いて二、三分の距離である。ここからも、署の前の駐車場に停められているパトカーが見える。洗車したてなのか、春の陽光に照らされて、玩具みたいにピカピカ光っている。

歩き出しながら、大木が言った。「ポンちゃん、最近なんか悩んでねえか？」

口調は呑気だが、大木らしい率直な訊き方だった。貴子はぎくりとした。

「男か」と、大木は続けた。おかげで、貴子は笑うことができた。

「ワタクシが男に悩めるくらいなら……」

「まあ、そうだな」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。